見えない本当の姿を感じ取る感性

家庭訪問で…

私（筆者）が、教員に成り立てのころ、担任した学級の中で、いつも一人っきりで寡黙な秋子さん（仮名）がいました。

5年生からの持ち上がりで、1年間一緒に生活して、秋子さんはおとなしい性格の子どもなんだと思いこんでいました。

ところが、ある日、秋子さんの家に家庭訪問に行った時、その考えが間違っていたことに気づかされました。その年の4月から同じ学級に転入してきた弘子さん（仮名）と今まで見たこともないような笑顔いっぱいに、大きな声を出して楽しそうに遊んでいる彼女の姿を見かけたからです。その時、私の胸に今まで感じたことのないような痛みが走りました。

「これまで、自分は子どもたちの何を見て一緒に生活していたのだろうか。なぜ、この子は学級の中でじっと黙って、自分を隠して生活していたのだろうか」

私が本当の秋子さんを見ることができた、本当の姿を感じることができた瞬間でした。

弘子さんの訴え

すぐに、2人に話しかけると、弘子さんが、小さな身体いっぱいに怒りをあらわにして、「秋子さんは、低学年の時に転入してきて、友だちを作ろうとふざけ半分でみんなを追いかけたり、驚かせたりしたことが原因で、周りから仲間はずれにされてしまったみたいです。そればかりでなくて、周りからいやなことを言われても言い返さなかったことで、一方的にきついことを言われるようになりました。それから、だんだんと周りの友だちと話さなくなったようです」と、言ってきました。そして、続けて、「学級会を開いて、秋子さんが困っていることをみんなに訴えていきたいです」と、言うのでした。

私は、すぐに学級会を開くことにしました。学級会では長い時間、話し合いが行われ、学級全員で相手の気持ちを考えることの大切さに気づくことができました。

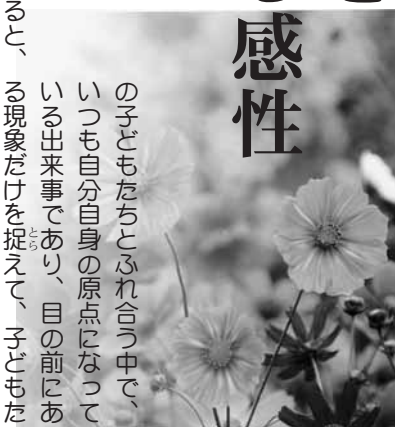
私にとってこの経験が、日常の子どもたちとふれ合う中で、いつも自分自身の原点になっている出来事であり、目の前にある現象だけを捉えて、子どもたちの本当の苦しさやきつさがいかにわかっていなかったか、を真剣に考えるきっかけになったと思います。

私たちは、表面だけを見て判断してしまっていることはないでしょうか？　おかしいことに気づき、本当の姿が見えるところまで歩み寄っていくことが差別のない世の中を創っていくことになると思います。

本年度も、1月28日（土）に益城町文化会館で、人権の大切さを考える「益城町人権フェスティバル」が開催されます。

町内小中学校の子どもたちも出演し、人権の大切さを訴えていきます。町民の皆様も、子どもさん、お孫さんとともに参加されてみてはいかがでしょうか。子どもたちの真剣な発表の姿を通して、見えない本当の姿を感じ取る感性も高まっていくものと思います。

益城町教育委員会



ふるさとの地名漫歩

歴史の変遷と地名 339

矢嶋姉妹周辺㉔

参考までに潮井宮社伝を原文のままに紹介します。

「塩井宮。神殿二間に三間、社地貳千坪、松檜數千本立。祭日三月・十一月十四日。祭神、速秋津彦神、速秋津姫神、沫那藝神。勸創立應永元年十一月十四日。甲斐佐渡守。時尓矢島氏某建立。社内岩間より冷水湧出事如瀧津瀬。津森拾七ヶ村田池養水之根源二而強雨大旱無憂、數千丁旱損ノ無災郷中之崇敬者云更也。誠神慮應護可言。（以下略。應永元年は一三九四年）。

意訳しますと「今の塩井宮の6坪の神殿は、矢島某氏が建て、敷地は2千坪、数千本の松檜が生える。創立は應永元年11月14日。当時の神官は甲斐佐渡守。滝の様に湧き出る水は、津森郷17か村数千町の水田養水として干害の災いもなく、郷中の崇敬は言うまでもない。この神の恵みは本当に有り難いことだ」とあります。

昭和27年、熊本は大干ばつに見舞われ、8月のある日、木山川（現秋津川）の水系に養水を頼る嘉島、秋津を含めた下流の村々の農民1，000人近くが境内に入れず杉堂の村道まで溢れる程に潮井宮に集まり、雨乞い神事がありました。社の祭神三柱は水の精であり、水神として郷民の深い尊崇を集めてきた神社です。

境内に1本の杉の神木があります。西南戦争に政府軍軍夫として従軍し凱旋記念にと杉堂の山内儀平氏が、翌年3月植樹と伝える植樹者が明確な古木です。

ここは益城町少年キャンプ発祥の地で昭和40年7月、松野國策（益城町教委、日本キャンプ協会上級指導者）、松岡洋（資格同）、山村益子（熊大教育学部学生）の3人で創始され、小学6年生を対象に20年続きました。

益城町文化財を訪ねる会
会長　松野國策

潮井宮境内の杉の神木